ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

　差し伸べられた手を取ろうとすると、六塚の体がグラッと揺れた。

「青柳雅也です」

(私はルカリオ。まあ、そのまんまだが)

　すぐに手を掴んで六塚の体を支えながらも、雅也達も自己紹介をする。六塚は「大丈夫だ」と呟いたが、胸につけられた大きな切り傷からは、今も血が少しずつだが地面に垂れていた。傷は一本だけだが、相当深いらしい。

(さっさと下山したいところだが……この怪我で無理に動くのはかえって危ないな……)

　あまりの痛々しさに、ルカリオは顔をしかめてそう言った。

　だが、心配は無用というように、六塚は首を振って、腰に付いたボールを取り出し、空中に放る。中から出てきたのは、ピンク色の丸い、まるでナースのようなポケモンだ。カンガルーのようなポケットがあり、中には白い卵が入っていた。しあわせポケモン、ハピナスである。高い耐久力もさることながら、一般的には、進化前のラッキー共々病院で見かける事が多い。

「ハピナス、卵産み！」

　六塚がそう指示すると、ハピナスはポケットの中の卵を取り出して、中の黄身を傷口にぶちまけた。するとたちまち、六塚の体の傷が癒えていき、数秒後には傷口は完全に塞がっていた。

「おぉー」

　そんな光景を見て、雅也は感嘆の声を上げる。隣にいるルカリオも、声こそ出さないものの、凄いものを見たという目をしている。毎日修行している身としては、お手軽に怪我を治せる能力は羨ましいことこの上無いのだ。

「どうだ、凄いだろう」

　そんな彼等に、六塚はドヤ顔でウインクを決める。別に彼が凄い訳では無いのだが、それでも子供からキラキラとした目を向けられると、六塚としても悪い気はしない。

「こいつは大学医学部直接医療学科にいて……って、子供には分からないか？　とにかく、凄くレベルの高い学校で勉強していてだな。俺達が怪我をした時、こうして治療してくれるんだ」

　ついつい自慢をしてしまったものの、途中から頭にハテナマークを浮かべた雅也達に、もう少し分かりやすい言葉で言い直す六塚。一応、雅也とルカリオも、『八上大学』という名前は知っていた。拓馬の目標が、そこを主席とか何とかというやつで卒業することだと、よく聞かされていたからである。

「ちなみに俺は、理学部超能力物理学科で」

　そう言って言葉を切ると、六塚は腰についたボールを二つ取り出して、雅也に見せた。

「こいつら、カビゴンとフーディンと一緒に勉強しているんだ。ほら、出てこい！」

　放り投げたボールから、二匹のポケモンが出てくる。一匹はさっきジャックのガブリアスに倒された、白と黒を基調にした、穏やかそうな顔をしたまんまるい怪獣のようなポケモンだ。いねむりポケモン、カビゴンである。体の数箇所に、軽い打撃痕があった。明らかに攻撃を躱そうとした位置に付いているが、まあこいつではジャックのガブリアスの、残像すら残らない程のスピードにはついていくのは難しいだろう。カビゴンはどちらかというと、相手の攻撃を耐えて反撃するような戦術が向いている。最も、あのレベルのスピードから繰り出される攻撃を耐えられるポケモンなど、世界中探してもいるかどうかは怪しいところではあるのだが。

　そう考えると、よくこの程度の怪我で済んだものだと雅也達は思った。

　もう一匹は、雅也達をここまで『テレポート』させたポケモン、フーディンだ。尻尾の無い、人型の狐のようなポケモンで、両手に銀色のスプーンを持っていた。『ねんりきポケモン』という分類の通り、体全体を超能力で支えているそうだ。体を動かすのも、筋肉ではなく超能力を使っているらしい。

　ちなみにこのフーディン。体に目立った外傷は無いが、相当疲れていた。極限のシチュエーションで『テレポート』を使ったというのも理由の一つだが、それ以前から相当体力を消費していたと、雅也達は記憶している。理由を聞けば、攻撃こそ受けていないが、ガブリアスが移動する時に出来た風圧で大ダメージを受けたとか。

「普段勉強ばっかして、鍛えてないからな……」

　というのは、六塚の談である。聞けば、ポケモンバトルも偶にやるそうだが、バトルをするのは専らカビゴンのみなんだそうだ。

「今日は、卒業論ぶ……大学の授業で必要なものを探しに来たんだよ。全く、何であんな奴に襲われなきゃならないんだか……」

　途中でどもったものの、六塚はそう言って溜息を吐いた。その横で、ハピナスが二匹を治療している。ちなみにルカリオも、さっき卵の黄身を体にかけてもらったので、今はもう全快だ。

「まあ、そんな事考えていても仕方ないか……早いところ、さっさと山を下りよう」

「ですね」

(だな)

　六塚の提案に雅也達も頷く。外に出ればジャックと出会う危険が高まるが、下山するのに支障がなければ早めに行動するほうがいいと彼等も思っていた。いくらここが人目に付かない洞窟だとしても、いつまでもここに留まっているのはかえって危ないからだ。

　そうと決まれば長居は無用なので、雅也と六塚は自分のポケモンをボールに戻す。そして、洞窟を出た。

　この時、ボールに戻ったルカリオは、ふとある事に気が付く。まだ波導の使い方が未熟なためか、今まで『それ』をキャッチ出来なかったのだ。ボールの中で青ざめたルカリオは、慌てて主人に危機を知らせようとするが、もう遅い。

「みぃつーけた」

　ジャックの声が、洞窟を出た二人の耳に飛び込んできた。